

服のチカラ

世界を良い方向に変えていく

特集 難民の未来は、私たちの未来



世界を良い方向に変えていく

服のチカラ

16 難民の未来は、 私たちの未来

表紙写真：中野正貴

2006年にはすでに4,000万人に届こうとしていた難民の数が、10年を経た今、6,000万人を超えるほどに膨らんでいます。内戦や迫害、災害から逃れるため母国を離れざるを得なかった人びと。着の身着のまま国境を越え、ときには命をかけて海を渡る人びとが増えていく一方の現状は、第二次世界大戦後、最悪の事態といわざるを得ません。

難民の願いは、安全な暮らしを取り戻すこと。食料、水、医療、住まい、服はもちろん、教育を受け、働く機会を得て、家族とともに暮らすこと。いずれも私たち人間にとって、最低限の尊厳を守り、生きていくために必要なものばかりです。

難民問題は、従来の方法や枠組みだけでは、もはや対処しきれない段階に入りつつあります。しかし、世界がグローバル化するなか、難民問題は決して遠い問題ではありません。たった今も、生命と尊厳を脅かされ続けている隣人の問題であり、私たちの未来にも直結する問題です。

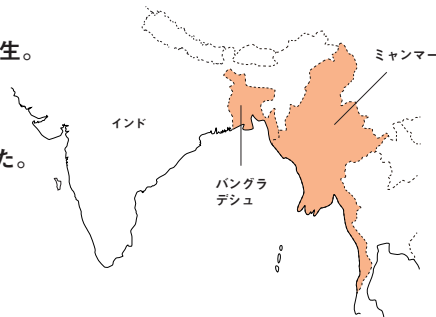
「服の会社だから、できること」は何か。お客様とともにできることは何か。ユニクロが取り組む3つの活動、「ともに働く」、「服を届ける」、「知り・学び・体験する」とおして、難民問題を考えます。

※難民の数は、2016年6月現在の概数



10年後には、ユニクロの一員として バングラデシュに逃れた難民を助きたい

ミャンマーの少数民族ロヒンギャの医師だった父は、政治活動を理由に身の危険を感じバングラデシュへ。母は3人の子どもを連れてその後を追いました。カディザは6番目の子として避難先のバングラデシュで誕生。同じような経緯で日本に逃れ、難民認定された夫との結婚が決まり、2006年、冷蔵庫のなかのように寒い大晦日に来日しました。彼女には決して諦めず抱き続けている夢があります。



写真：中野正貴

私は10人兄弟の6番目です。上の3人は両親と同じミャンマーの生まれ。4人目からは逃れた先の隣国、バングラデシュで生まれました。父も母もロヒンギャというイスラム教徒の少数民族です。父はミャンマーの首都にあるヤンゴン大学で学んだ医師でしたが、ロヒンギャで医師になる人はめったにいません。大学を出ても就職できなかつたり、そもそも教育を受けること自体、難しかった。父はそういう状況に抗議し、初めてのデモを仲間と行ったんです。そのためにミャンマーにいらなくなり、まず一人でバングラデシュに逃げました。

そのとき母のお腹には4番目の子どもがいました。母はモンドウという村の大地主の娘で、その地区ではロヒンギャが平和に暮らしていました。ところが、軍事政権が樹立されると、移動や教育、仕事など、厳しい制限を受けるようになりました。母は、父から届いた手紙だけを頼りに、止めようとする祖父を振り切って、着の身着のままでバングラデシュにわたりました。豊かな生活を捨てて、やっとの思いで再会できたものの、枕すらない貧しい暮らしだったそうです。

子どもたちの将来を心配した父は、ロヒンギャであることを隠し、バングラデシュ人のように振る舞って暮らすしかありませんでした。クリニックの医師として雇われると、腕が認められ、5年後には大きな病院に転職しました。

やがて父は後から逃げてきた人びとを支援したり、難民キャンプに暮らす人びとの状況を改善するため、政府と交渉したりする活動を始めました。医師という社会的

地位があったから、発言できるようになったんです。ところが政権が変わり、医師の仕事は奪われてしまいました。父は家族を支えるためにあらゆる仕事をしなくてはならず、家にいたことはほとんどありません。

父は、いつかミャンマーに戻る夢をもっていたので、娘たちを同じロヒンギャの人と結婚させようと、いろいろな国に逃げていった同胞のなかから相手を探してきました。上の姉2人はアメリカで難民認定されてアメリカ国籍をもち、3番目の姉はサウジアラビアに住む人と結婚しています。

医師を諦めて結婚

私の夫はミャンマー生まれ、母方の親戚です。夫の父は歴史家で、作家でもあるのですが、軍事政権の意向に反する本を書き、目をつけられていました。ある夜、身を隠していた父の身代わりとなって、まだ18歳だった夫が連行され、拷問を受けました。釈放後は危険な地元を離れ、ヤンゴン大学で学んでいたのですが、卒業式の直前に身边が危なくなり、話せばそれで映画や本になるような逃避行を経て、命からがら日本にたどり着きました。その後、難民申請をし、2年半後ようやく難民と認められました。

私たちが初めて会ったのは、彼が日本で難民認定された後、一時的にバングラデシュを訪れていたときでした。私は18歳、彼は28歳。当時、私は医師を目指して必死で勉強していたのですが、受験の申請でロヒンギャとわかってしまったら、家族にまで迷惑がかかると





ということになり、泣く泣く受験を諦めました。

そのタイミングで彼と引き合わされたのです。私の結婚の条件は、日本で必ず勉強させてくれること(笑)。

2006年12月31日、初めてやってきた日本は冷蔵庫のなかみたいに寒かった。4月にRHQ(難民事業本部)が用意してくれたマンションに引っ越して、日本語の勉強をゼロから始めました。ひたすら勉強して、6カ月のプログラムを2カ月で終わらせました。修了後に受ける日本語能力検定は3級から2級に繰り上げて挑戦。合格したときは、本当にうれしかった。

日本で学校に行かせてもらう約束ではあったけれど、夫の収入ではとても無理だろうと諦めていました。でも彼は、どうしても私に勉強をさせてやりたい、奨学金をもらえるかもしれないし、何とかしよう。

相談にのってくれたRHQの先生が、1級を取れるくらい勉強すれば大学にも受かるといって、新宿の日本語学校を紹介されました。試験を受けて、学費は70%免除されることになり、それから2年間猛勉強です。卒業のとき、青山学院大学がUNHCRの難民高等教育事業と提携して、毎年1人、学費免除の奨学生を募集していることを知りました。宝くじを買うつもりで受けたら、奇跡的に合格したんです。

大学でユニクロの難民支援を知る

大学では難民について学ぼうと総合文化政策学部に入りました。2年生のとき、ユニクロの難民支援について、授業で知りました。もともとユニクロのファンだったんです。手軽な値段でどこでも買えるというのが主婦としてありがたく、気に入っていました。

1年生の学年末試験のとき、妊娠がわかりました。夫はそのとき、「お腹のなかにいる間は、あなたががんばって。生まれてきたら、私がんばるから」と。2年生の夏、息子が生まれました。夫はそれまでの仕事を辞め、自動車の中古販売をしながら子どもの世話をし、私は一所懸命大学に通ったんです。3年生の期末試験の頃、2人目を授かりました。2人の子育てをしながら先生や友だちに助けをもらい、何とか卒業できました。卒業論文は日本の難民問題についてでした。

学生時代、ユニクロ池袋東口店で10日間の大学生対象のインターンシップに参加しました。私、声がすごく大きいんです。「いらっしゃいませー、いらっしゃいませー」と声を出すことを「活気出し」というのですが、「あのインターンの子、活気出しがすばらしい。1階か

ら3階まで聞こえるよ」とスタッフ仲間にいわれるほどでした(笑)。

店長もスタッフも、みんな仲のいいお店でした。インターンの後、正式にアルバイトをしてみたいと店長にいつてみたら、ぜひ、といってくれたんです。「私は外国人だし、イスラム教徒だからベールをつけているけれど、このままでいいんでしょうか」と聞いたら、「ぜんぜん大丈夫」と。もう、感激でした。そのとき、将来ユニクロの一員になれば、難民のために働くことができるかもしれないと思ったんです。

まず一人の自立を助けたい

池袋東口店でのアルバイトは、出産を機に辞めたのですが、子どもが大きくなったらいつでもおいでと店長がいつてくれました。その後、東日本大震災で夫の経営するハラルフード(イスラム教徒の人びとが食べられる食品のこと)の店が経営不振になって、一家で群馬県の館林に引っ越すことになりました。私も大学を卒業したところで、群馬にはロヒンギャの仲間もいたんです。そのことを当時の店長に伝え、館林店で働いたらどう?といってくれました。去年の4月から、子どもたちを保育園に預けて、館林店で働いています。

皆さん、難民というと、身なりの汚い貧しい人たちと思うかもしれないけれど、自分の国では、豊かな人生を送っていた人たちかもしれないんです。生きるためにすべてを捨てて、何もない状態でほかの国に逃げなければならぬ。この気持ちをどう説明すればいいでしょう。

難民を受け入れる国には、数だけを増やすのではなく、彼らが夢を失わないように、自立できるまで支えてほしい。教育や仕事の機会があれば、人間は可能性に向かって前を向けるはず。結果的には、難民を受け入れた国のプラスにもなると信じています。

私の夢は、今から10年以内、いえ、できれば5年以内に、バングラデシュの難民キャンプにいるロヒンギャ難民のために、ユニクロの一員として支援できるよう、力をつけることです。今、5歳と3歳の子どもがもう少し大きくなったら、フルタイムの正社員になって、いずれはそういう仕事をしたい。それが難しければ、個人としてでも、何か難民のための仕事をしたい。

一人が支援を受けて自立できれば、その人の後ろにまた誰かがつながっていく。自分たちの小さい力でも、何かできるはず。私も夫も、そう考えています。



column

難民の今、そしてこれから

6,000万人を超える
難民・避難民の問題を
ともに目指す未来として考えます。

写真：国連難民高等弁務官事務所（8 ページ左下以外）

難民は私たちと同じ、普通の人びとです。

普通の人びとが、内戦や人権侵害、民族や宗教の違いによって起こる迫害により、家や土地を追われ、安全に暮らすことのできる土地を求めて国境を越える。やむを得ず、難民になったのです。

しかし、パリやベルギーで起こった同時多発テロがきっかけとなり、これまでヨーロッパが比較的寛容に受け入れてきた難民を、これ以上受け入れない、排除しようとする新たな動きが、一部で目立つようになりました。難民はさらなる犠牲を強いられています。

予想をはるかに超えた数の難民を受け入れるには、相当の予算、人員、居住施設が必要です。宗教、文化、習慣の違いによって起こりかねない摩擦も、相互理解によって未然に防がなければなりません。受け入れ国にとっても、緊急でありながら、抱えきれない難問に直面する事態となっています。これもまた、厳しい現実です。

17年もの避難生活

2011年から続くシリア難民の問題も、ヨーロッパばかりでなく、国境を接する隣国に大きな負担を強い

ています。

国外に脱出することができず国内で避難民として家を追われる人も多くいますが、選択の余地もなく国境を越える難民も増え続けています。隣国のトルコ、イラク、ヨルダン、レバノンでは数百万の難民が暮らしています。人口400万人あまりのレバノンが受け入れている難民は100万人。トルコにいたっては、270万人にものぼり、今や世界最大の難民受け入れ国となっています。

母国に平和が取り戻されれば、難民は母国に帰り、自分の家で暮らしたいと考えるでしょう。しかし、帰国のめどが立たず、新たな生活の可能性を求めて第三国に向かうことも難しく、その多くが周辺国に留まっている現状です。

避難先での暮らしを余儀なくされる時間は、平均17年といわれています。難民キャンプで生まれ育ち、教育の機会も、仕事に就く機会も得られないまま、将来の見とおしをもてない若者が自立の可能性を奪われている。

現在ばかりでなく、未来が奪われている状態では、希望を見いだすことは困難です。

人を育て、土地を豊かに

難民を多数受け入れている隣国の地域もまた、決して豊かではありません。開発の行き届かない土地であることがほとんどです。難民にとって必要な教育や医療が、地域の住民からも求められているのです。

難民受け入れ地域に、道路や電気、水道のインフラを整え、学校や病院を、雇用を生む職場をつくる。さらには初等教育を受けた子どもたちに高等教育を目指す機会を与え、職業訓練を受けた人には仕事を与え、経済的な自立を支援する。時間の止まったような難民キャンプから、地域と難民の未来を同時にひらく支援への転換。

国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）や各国政府、難民支援組織との連携を土台に、民間企業の参入や教育機関との連携も取り込んで、平均17年を過ごすことになる土地に、人間の尊厳と、教育と雇用の機会を得られる場と仕組みをつくり、地域経済の安定と発展をもたらす——そのような新たな支援の取組みが始まっています。

服の会社だから、 できること

世界中の難民に服を届ける「1000万着のHELP」プロジェクトは、おかげさまで回収枚数が1,000万着を超えました。難民に「服を届ける」ばかりでなく、難民について「知り、学ぶ」ことにもつながった「全商品リサイクル活動」の舞台裏をお伝えします。

ユニクロは2006年から、グローバルパートナーシップを結ぶ国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR) や NGOとともに、世界中の難民や避難民、災害被災者、妊産婦や母子などへの支援として、服をお届けしてきました。

服は、防寒、防暑、衛生はもちろん、人間の尊厳と安全を確保するため、はかりしれない役割を果たしています。学校に着て行く服がないために教育の機会を失ったり、慣れない土地で暮らすなかで服がないために生きる張り合いを失うことが、少なからず起こっているからです。

服のデザインや色合い、着心地が、気持ちを前向きに明るくしてくれることを、私たちはよく知っています。難民の人たちにとっても、それはまったく同じです。たった一枚の服が、思わぬ笑顔をもたらすことがあるのです。

「1000万着のHELP」プロジェクト

難民問題が急速に拡大し、深刻化するなかで、「世界中の難民にユニクロの服を届ける」という目標をかかげて、2015年10月にスタートしたのが、「1000万着のHELP」プロジェクトでした。

個々のお客様からの店頭での回収はもちろん、この活動に賛同する企業、団体など、さまざまなグループが独自に広報活動を行い、積極的な回収に取り組んでくださったことが、今回の1,000万着達成の早期実現を可能にしました。

しかし、目的もわからないまま服の回収に協力してもらうことはできません。まずは難民問題に関心を寄せていただき、回収への自発的な動機をもっていただくため、難民の避難生活はどのようなものなのか、難

民にとって服はどのような役割を果たすのか、丁寧に伝える必要があります。

服のリサイクル活動へとおのずとつながる最大、最短の入口は、難民問題を「知り、学ぶ」こと。

その目的のもと、2013年から「届けよう、服のチカラ」プロジェクト」をスタートさせました。全国の小学校、中学校、高等学校と協働し、難民問題の周知と服の役割について学ぶ場をつくり、従業員が講師となって出張授業を行い、生徒が自主的に服の回収を行う活動です。

今回の「1000万着のHELP」プロジェクトでは、教育機関のみならず、さまざまな団体が、服の回収の広報活動を自主的に行ってくださいました。そのなかで、「難民問題についてもっと知りたい」という声が多数寄せられるようになり、難民問題の深刻化が潜在的な強い関心と呼んでいる様子うかがえます。

さまざまな団体に属する皆さんが、家庭に帰って服の回収を呼びかけ合うとき、家族の間でも、難民問題について話し合う機会、時間が生まれたようです。

これまでは教育機関との協働で行われてきた「届けよう、服のチカラ」プロジェクト」の、さらなる広まりを予感させる、はつきりとした手ごたえがありました。

ボーイスカウトの取組み

今回の「1000万着のHELP」プロジェクトに参加してくださった団体の一つに、公益財団法人ボーイスカウト日本連盟の皆さんがいます。

昨年、世界155の国と地域による「世界スカウトジャンボリー」に集まった約34,000人の参加者に、ユニクロが大会用オリジナルポロシャツを寄贈したことがきっかけとなって、ボーイスカウトの指導部でお互

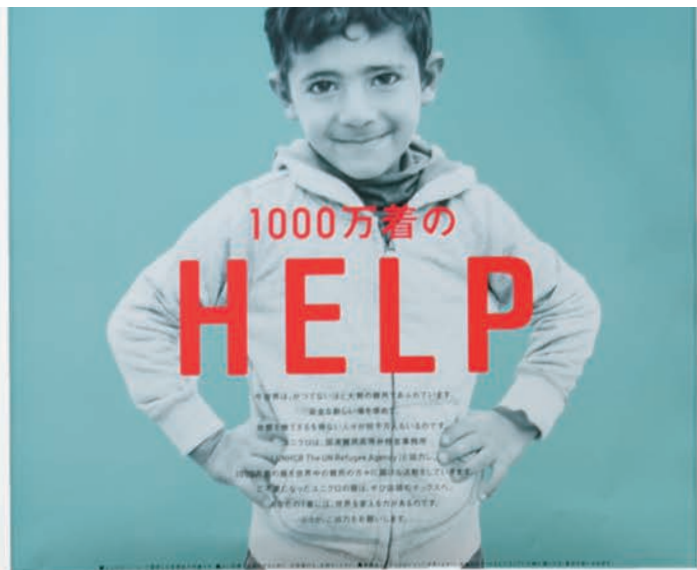


写真：中野正貴



写真：上岡神輔

2015年10月からスタートした「1000万着のHELP」プロジェクトは、全世界で展開しました。たとえば、中東から逃れてきた人たちが多数暮らしているドイツ・ベルリンでは、ユニクロ ドイツ事業が現地NGOと協働して難民に服の寄贈を実施。2016年1月には、厳しい冬が越えるよう防寒着を中心とした約5万着を約1万人の難民に届けるため、6つの難民キャンプをまわりました（左上）。日本では、早稲田大学をはじめとする大学生たちが校内で呼びかけ、たくさんの服を回収し、寄贈してくれたほか（右上）、プロゴルファー・アダム スコット選手など、ユニクロのグローバルアンバサダーたちも協力し、活動を広めてくれました（右中）。5月に1,000万着の回収を達成した後、早速、ルワンダの難民キャンプを訪れ、約54万着の服を約18万人の難民に届けました。



いに声をかけ合い、「1000万着のHELP」への積極的な取り組みが始まりました。

ボーイスカウトの活動の目的は、「より良い社会をつくる」こと。生命を尊重する心を養い、仲間と話し合い、協力する心を育てながら、社会奉仕活動を行うこと——。たとえば国内で、巨大地震によって大きな被害がもたらされたとき、子どもたちは街頭に出て、募金活動を行っています。

「1000万着のHELP」は、ボーイスカウトの子どもたちにとって、これまでの活動にも自然につながるものだろう——。そのような認識が指導者のあいだで高まり、ボーイスカウト日本連盟のウェブサイト「1000万着のHELP」を告知することから、活動への取り組みが始まりました。

自分の服を難民の子どもたちへ

学年、年齢によって部門を分けて活動するボーイスカウトは、小学校1～2年生が「ビーバースカウト」、3～5年生が「カブスカウト」と呼ばれています。世界が今のような情勢にあるのか、難民とはどういう人たちなのか、あらかじめ知っている、というわけにはいかない年齢の子どもたちです。しかし今回は、この2つの部門が中心に取り組みました。

難民にとって、もっとも不足しているのは子ども服です。まず、子ども服を集める必要性がありました。一方で、「難民とは？」と言葉で説明されても、理解するのはまだ難しい年齢かもしれません。しかし、自分たちが着ていた服を自分たちの手で集め、それをユニクロの店舗に届けば、まさに今困っている難民たちに手渡され、難民の子どもがその服を着てくれるのだ、という具体的なイメージは、子どもにももってもらえることではないか。「難民とは何か」を学ぶのに早すぎることはない。これは良い機会だ、と指導者たちは

考えました。

ボーイスカウトによる回収は、子ども服であればユニクロの服以外にも回収可能とし、自分が身に着けていたものが役に立つ、という実感や納得を最優先にしました。

子どもから保護者への広がり

もう一つの収穫は、ボーイスカウトの保護者たちも、「1000万着のHELP」をこの機会に初めて知ったケースが多くあった、ということでした。子どもたちが家に帰って、今回の活動の話題になったとき、初めて親子の間で「難民」という言葉が語られる。——それぞれは小さな一歩でも、大きな意味をもつ着実な広がりでした。

回収がスタートし、実際に動き始めると、子どもも保護者もしだいに活動に熱がこもっていきました。たとえばフェイスブックに活動の様子を写真とともに載せると、「いいね!」の数がいつもよりはるかに多くなってびっくりした、という保護者もいたそうです。

「難民」というキーワードから、活動の様子がシェアされ、多くの共感を呼んだのです。

また、活動後にボーイスカウトのウェブサイトの記事としてアップしたところ、通常の10倍以上の人びとが閲覧することになりました。これがきっかけとなり、ボーイスカウトの活動全般に興味をもつ人が飛躍的に増えた、という予想外の反響もあったようです。

難民の存在を知り、難民の問題を学び、実際の回収作業を体験する。その活動を発信することによって、活動の輪がさらに広がる。

1,000万着達成後も、「全商品リサイクル活動」は続きます。世界から、難民と呼ばれる人が一人もいなくなるまで。引き続き、皆さまのご協力をお願いします。



気に入った服もあったけど、来年はもう着られないよとお母さんいわれて出しました。もし難民の子どもがクラスに来たら?日本語を教えます。その子の言葉も覚えたい。



思い出があって捨てられなかった10年分の服を出しました。最初は「え?」と思ったけど、服のない難民の役に立てばうれしいです。みんな早く幸せになればいいな。



死んだり、避難できないで、家族と別れてしまってお父さんがいると聞きました。無事に帰ってほしい。心配。子ども服ばかり集めたけど、大人服も必要だね。



難民問題は 私たちの問題です

今、世界各地では、紛争や迫害によって、故郷を離れざるを得ない難民や国内避難民があふれています。その数は世界全体で6,000万人を超えました。これは今までに世界が経験したことのない、きわめて深刻で緊急な事態です。

難民には、家族を失った人、家を失った人、職業を失った人がいます。勉強を続けることが不可能になった学生もいます。心や体が傷ついた人、病気に苦しむ人がいます。自分のおかれた状況を理解できないまま、未来の見えない環境におかれた幼い子どもたちがいます。

ユニクロを展開するファーストリテイリングは、服をつくり、服を販売する活動をおして、「服を変え、常識を変え、世界を変えていく」ことを目指しています。難民問題の現状を把握し、自分たちにできることを考え、支援を実行するのは、グローバル企業の役割であり、責任です。

深刻な現状を受け、2015年10月、難民に服を届ける「全商品リサイクル活動」を強化し、世界16カ国・地域の全店舗で、ユニクロおよびジーユーの服を回収するプロジェクト「1000万着のHELP」を開始。全世界のファーストリテイリンググループ従業員はもちろんのこと、民間企業、教育機関、さまざまな団体が、服の提供に参加しました。その結果、2016年5月、目標の1,000万着を突破。皆さまのご協力とご支援に、心より感謝いたします。

たった今も、生存権を脅かされるような過酷な状況に多くの難民はおかれています。生きることに希望をもてない難民が支援を待っている。これは遠い国の遠い問題ではありません。世界がグローバル化した現在、難民はあらゆる意味で私たちの隣人です。あらゆる地域の人びとと協力しながら、知恵と支援を集める必要があります。難民問題はまちががなく、私たちの問題です。

難民の一人もいない世界が実現するその日まで——。引き続き皆さまのご理解とご支援を、心よりお願いいたします。



まだまだ、続きます

服を必要とする人がいる限り「全商品リサイクル活動」は続きます。店舗に常設されているリサイクルボックスに、あなたの服を入れてください。お待ちしております。



- 営業時間内であればいつでもお預かりしています
- 店頭のリサイクルボックスに入れていただくか、スタッフにお声がけください
- ユニクロ・ジーユーで販売した全商品が対象です
- 良い状態でお届けするために、お洗濯のうえ、お持ちください
- 衣服のポケットなどに入っていた物に関しては、責任を負いかねます
- 破れ、しみなどがあり、支援衣料として適さない場合でも回収させていただき、燃料化して最後まで生かします

多くの方のご支援により、世界中の難民・避難民のために
1000万着の服が集まりました。私たちが責任を持って、役立てます。
ご不要になったユニクロの服は引き続き、店頭までお持ちください。
あなたのご協力で、心より感謝いたします。



uniqlo.com/jp/csr



10
MILLION
THANKS

1000万着のご支援に、心より感謝します。

Grandmother with grandson
Kyrgyzstan

www.uniqlo.com/jp/csr
www.unhcr.or.jp